The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学術的文章の引用に関する意識調査 ： 中国人上級日本語学習者の事例分析
Author(s)	劉, 偉; 村岡, 貴子
Citation	多文化社会と留学生交流 ： 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2019, 23, p. 77-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71589
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第23号（2019）

学術的文章の引用に関する意識調査

―中国人上級日本語学習者の事例分析―

劉　偉*・村岡　貴子†

要　旨

本稿は、中国人上級日本語学習者のアカデミック・ライティング（AW）における引用に関する意識の把握を目的とし、中国の大学で日本語を専攻する学部三、四年生各15名に対して質問紙調査を行い、自由記述の回答についてテキストマイニングを行った。協力者は先行研究を引用する必要性について執筆者と読者の立場から認識し、他者の研究や文献を権威あるものとして、そこから知識吸収や情報取得という「学習者としての姿勢」が顕著に見られた。一方、先行研究を批判的に読解し、メタ的に捉えた上で検討して評価する意識が薄かった。また、引用の知識を多く有する者ほど低く自己評価する傾向があった。実際のAWにおける引用の困難点として、先行研究の適切な位置づけへの判断力、間接引用のための要約力、言語表現の調整力の不足などが挙げられた。上記問題に対する協力者自身の対策は妥当性に欠け、問題解決に至らない場合が多かった。

【キーワード】アカデミック・ライティング、引用、意識、中国人上級日本語学習者

1　はじめに

中国の大学における日本語専攻教育では、中国教育部が2001年に制定した『高等院校日语专业高年级阶段教学大纲（高等教育機関の学部高学年における日本語専攻教育指導要領）』の規定によると、調査報告、課題レポート、卒業論文などの学術的文章ジャンルが学部段階におけるライティング教育の指導項目として定められている（刘　2017：10-11）。それにしたがい、学部三年次にアカデミック・ライティング（以下、AW）関連科目が開講され、四年次に卒業論文の執筆が設けられている。種々のAW指導や実践においては、資料や文献の情報を自身の文章への適切な引用が特に重視される。一方、先行研究の扱い方が難しいという声が依然学習者に多く聞かれ、実際のAWにも不適切な引用が多く見られる。

そこで、本研究は当該学部生らの引用に関する問題の一端を明らかにし、原因を探るために、AW関連科目を受講し、関連指導を受けた高学年学部生30名に対して、AW時の引用に関する意識をアンケートにより調査し、また、文章作成タスクを実施した。本稿は、それらの調査のうち、意識調査の結果をまとめ、協力者の引用に関する内省を中心に考察を行う。

2　先行研究

AWにおける引用の問題は近年注目されつつあり、学術誌に掲載された論文の引用の実態に関する研究や、留学生や日本人学生の文章における引用の問題に関する調査・分類及び指導法の提案など、様々な観点から行われている。

*　華南師範大学外国語言文化学院准教授
大阪大学国際教育交流センター研究員（2017.9～2018.8）
†　大阪大学国際教育交流センター教授

学術論文の引用に焦点を当てた代表的な研究として、二通（2009）は学術論文における引用の方法と出現位置を調査し、指導のモデル案をまとめている。清水（2009）は5分野の人文系論文の引用を比較し、引用の表現方法は分野によって異なり、直接引用より間接引用が多用される傾向があると指摘している。また、清水（2010a）は引用文「～ハ～テイル」の使用目的を調査し、清水（2010b）は引用文の文末表現についてテンス・アスペクトの観点から分析している。矢野（2014a）は人文社会系4学部の優秀卒業論文の引用実態を調査し、学部間の特徴について比較している。山本・二通（2015）は人文社会系の資料分析型論文における引用・解釈構造について分類し、各種類が独自の機能を果たしていると指摘している。大島・生天目（2018）は資料分析型論文における歴史的史料の引用による叙述と解釈の表現の構造と類型・文体的特徴を分析している。以上の研究成果は、各分野の論文における引用の実態の解明、教育現場における引用の効果的な指導に大いに示唆を与えたものと言える。

一方、日本語学習者や日本人学生が実際に作成した文章における引用の問題点に注目した研究は、不適切な用例を抽出し、問題の分類を中心に行っている。

矢野（2014b）は学部留学生の論説文における引用の実態を調査し、引用の表現形式の使用や文脈への組み込みが、文章展開の中で十分に活用できていないことを明らかにしている。山本（2016）はAW初心者の論文の不適切な引用について談話分析を行い、「引用そのものに対する認識上の問題」「引用資料の著者と論文執筆者のモダリティ表現の混同」と「論文筆者の解釈のない引用」の3点を、問題が生じた原因として指摘した。中村他（2016）は留学生と日本人学生が作成した文章における引用の問題を分析し、「引用部分と自身の主張との関連が不明確」「直接引用か間接引用かという引用形態の選択が不適切」及び「引用したデータの質に問題がある」といった問題を指摘し、学習者における文章全体の構成、論の展開方法、引用の目的に対する理解不足を原因として挙げている。大島（2017）は日本人学生の授業課題における引用の問題を分析し、「引用記号の不備」「によると＋引用動詞」「引用と考察の区分の不明確さ」「引用＋と考えられる」及び「論文執筆者への敬称」といった五つの問題を指摘している。楊（2017）は中国の大学の日本語学習者が作成した卒業論文の引用について、引用密度、引用元、引用形式、表示方法、引用動詞、及び引用の位置に関する傾向を調査した。

上記の日本語学習者や日本人学生のAWにおける引用の問題点に関する分類は、表現形式とともに、引用の目的・方法、引用内容、形式上の手続きなどの側面から行われている。特に山本（2016）と中村他（2016）は、問題の原因について学習者の引用の意識に言及している。一方、それらは問題点をもとに行われた分析であり、学習者自らの内省を扱ったものではない。問題が生じる原因の調査・分析は十分に行われているとは言い難い。

そこで、本研究は、学習者の引用の問題に関する研究の一環として、意識調査を実施した。AWにおける引用の困難点、自身の過去の引用に対する評価などの内省について分析することによって困難点や問題の原因を明らかにし、学習者の引用への理解や意識を知ることで、指導や学習方法の改善に向けた示唆を得ることを試みる。

3　意識調査の概要

3-1　調査内容

意識調査は、2017年6月に中国のある総合大学で日本語を専攻している学部三、四年生各15名、合計30名を対象に実施された。調査時点における協力者の日本語のレベルについては、三年生と四年生はそれぞれ日本語能力試験2級と1級に合格し、また、中国国内の日本語検定試験四級と八級に合格している[1)]ため、上級日本語学習者と見なす。彼らに調査意図を説明して書面で協力への同意を得た上で、以下の項目を中心にアンケート調査票を配布して記入するよう求めた[2)]。

（1）過去のAW経験：

大学入学後から調査時点までの学術的文章の作成経験について「A受講科目のレポート」「B研究計画書」「C研究助成の申請書」「D研究報告書」「E卒業論文」「Fその他」といった六つの選択肢を提示して複数選択させた。

（2）引用に関する認識：

①学術的文章の定義と、②先行研究が必要とされ

る理由について自由記述で尋ねた。

また、③先行研究の扱い方について、筆者らのAW教育実践の経験から、学習者の誤解しやすいと判断したものを以下の通り七つの選択肢を作成して提示し、複数選択させた。そのうち、A～Dは、先行研究を理解した上で自分の文章に取り入れて文章化していくという、引用の方法や言語化に関連するものである。A、B、Cは適切で、Dは場合によっては不適切である。EとFは比較的短い表現や特定のフレーズに限らず、先行研究の結論や主張を自身のものとして扱うもので、剽窃にあたるものであり、明らかに不適切な記述である。

A. 複数の先行研究を引用する場合、それらの互いの関係を見極めた上で、自分の研究の論理にしたがってまとめなければならない。
B. 取り入れた先行研究について、評価すべき点や不十分な点を明確に述べなければならない。
C. 取り入れた先行研究と自身の文章の主張との関係を明確にしなければならない。
D. 複数の先行研究を引用する場合、時系列で配列すればよい。
E. 自分が思っていることは先行研究に既に書かれているが、それを読む前に思いついたため、先行研究に言及しなくてもよい。
F. 複数の先行研究をもとに、自分でまとめ直したため、自分の文章では、それらの先行研究に言及しなくてもよい。

（3）過去のAWにおける引用の経験と意識：

協力者の過去のAWにおける先行研究を引用した経験に基づき、①引用の内容、方法、及び分量などの的確さについて「A的確であった」「B的確ではなかった」「Cどちらとも言えない」から最も自分に相応しいものを選択させた。②BやCの選択者にさらに判断の理由を自由記述で回答するよう求めた。また、③協力者全員に先行研究の引用で感じた困難点と解決策について自由記述で尋ねた。

3-2　テキストデータ分析の方法

意識調査で得られた結果については、選択問題の回答を集計して観察し、自由記述問題の回答をテキストデータに電子化してテキストマイニング（Text Mining）を行った。

自由記述形式は選択肢形式と比べ、より具体的な記述があり、それらの言語表現を詳細に分類して結果を得ようとするものであり、多くの情報が獲得できる利点がある。

また、テキストマイニングとは、「テキスト（文章）をマイニング（情報発掘）することであり、定性的な特徴をもつテキストを定量的に分析すること」であり、「自然言語処理と統計解析・データマイニングの技術を核とし、それらの組み合わせによって実現される」（小林 2015：31）。論文や新聞記事のデータベース、心理学や教育学の人文社会科学系分野のアンケート調査の自由回答の分析に活用されている。質的方法と量的方法との両方の特徴をもつ分析手法として、協力者のAWにおける引用の意識をより本質的に探索するためのテキストデータの分析に適切な方法であると考える。

意識調査における自由記述は中国語と日本語の両方可とし、中国語での回答を筆者らが日本語に翻訳し、日本語のものについて内容を確認した上で文法的な誤用と、「自分の論文」と「自身の論文」のような同義表現を一つの表現に統一するなど、修正をして電子化を行った。

テキストデータの詳細は表1に示す。「**総抽出語数**」と「**異なり語数**」の2項目の（　）内の数値は実際に分析する際に使用された語数である。協力者1名につき記述内容を1段落にまとめたため、「**段落数**」は回答者数にあたる。過去の引用経験について「A的確であった」と自己評価した7名の者は内省を記述しなかったため、データⅢの段落数は23である。また、上記7名のうち1名はアンケート調査におい

表1　自由記述問題のテキストデータの詳細

略称	質問項目	総抽出語数	異なり語数	段落数	文数
データⅠ	学術的文章の定義	1,255（538）	283（208）	30	49
データⅡ	学術的文章で先行研究が必要とされる理由	1,557（633）	256（179）	30	61
データⅢ	過去のAWにおける引用への内省	938（406）	223（154）	23	50
データⅣ	過去のAWにおける引用の困難点と解決策	1,913（838）	368（274）	29	87

図１　テキストデータにおける抽出語分類樹形図

て、「引用の困難点を特に感じていない」と口頭で回答してデータⅣについて記述しなかったため、当該項目の段落数は29である。

本稿におけるテキストマイニングは、フリーソフトウェアKH Coder（樋口 2004）を用いて行い[3]、目視による作業も加えた。まず、データⅠ～データⅣをKH Coderに読み込んで前処理を行った。前処理では、フリーソフトウェアTermExtractによる複合語検索を行ってから、目視により確認して修正を加え、必要な複合語を登録し、関連のない記述を分析で使用しない語と指定した[4]。次に、前処理されたデータについて、文を分析単位としてWard法とJaccard距離を用いてそれぞれ階層的クラスター分析を行い[5]、その結果に基づいて、コーディング化した結果に合わせてカテゴリー分類を行い、考察を試みた。

図１はKH Coderによるテキストデータのコーディング化の過程で抽出された語に対するクラスター分析の一例である。本研究では、それらの結果についてさらに目視により精緻化を行い、カテゴリー名を付した。

4　結果と考察

本章では、まず、4-1で協力者の大学入学後のAW経験を把握する。次に、4-2で協力者の引用に関する認識、4-3で彼らが過去のAWにおける引用の経験と意識について調査結果まとめて分析する。その上で、4-4で典型例を提示し、協力者の既有知識と引用の実態との乖離など、習得過程にある様相を質的に分析し、教育上の示唆を得ることを試みる。なお、分析の便宜上、提示する例には下線や網掛けを付し、コード名はゴシック体で示す。

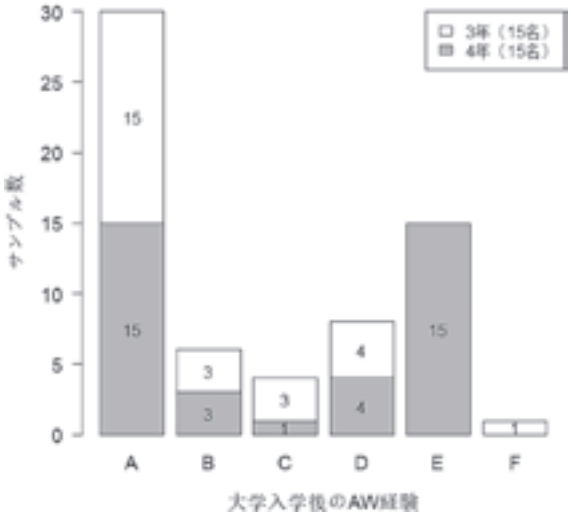

図２　協力者における大学入学後のAW経験
（複数選択可）

4-1　過去のAW経験

協力者の大学入学後のAW経験について調査した結果は図２に示した。全員「A受講科目のレポート」、四年生は「E卒業論文」の執筆経験があり、さらに大学生向けの「C研究助成の申請書」「B研究計画書」「D研究報告書」、また研究討論会での発表要旨とPPTのような視覚資料（「Fその他」）などを中国語で執筆した経験を有する者が数名いることが分かった。

この結果の背景には、協力者所属の大学におけるAW教育にあると思われる。彼らは全員三年次１学期に卒業論文執筆に備える目的で開講される「日語论文写作（日本語アカデミック・ライティング）」というAW関連授業を受講し、授業課題として「日本語学」「日本文学」「日本社会・文化研究」「日本語教育学」など、人文社会科学系の課題レポートを作成した経験がある。当該科目は、授業時間は２時間／週×16週間で、日本で出版された協働的タスクの効用を重視した教材（村岡他 2013）と配布資料を教材

とする。指導項目には、上記の教材に加え、実際の文章例を用いて先行研究の収集方法と、自分の論文やレポートへの扱い方が取り上げられている。指導形式は、教員による教材の説明や具体例の解説を経て、受講者がグループで議論した結果を発表し、異論などについてさらに議論し、最後に教員が解説する、という流れであった。

以上から、本研究の協力者は比較的均質なAW教育を受けており、かつ一定の執筆経験を有することが確認できた。

4-2　引用に関する内省

データⅠ～Ⅳの抽出語についてコーディング化し、クロス集計の結果についてFisherの正確検定を行った。各データのコードについて学年間に有意差が認められなかった[6)]。以降、三、四年生のデータを統合して分析する。

4-2-1　学術的文章の定義

データⅠの抽出語に関するコーディング化結果の詳細は表2に示した。

表2　データⅠのコーディング化結果（n＝49）

コード	頻度	関連語の例
内容上の特徴	41	専門性：専門用語　専門的　学術雑誌　研究者
		厳密性：厳密　厳粛　明確　正しい　端正性
		客観性：客観的　根拠　データ　事実　実験　真実
		論理性：論理的　論理性　論理
		独創性：自分　観点　主張　独創性　新しい
		一貫性：一つ　一貫　終始　体系的
構成要素	29	研究対象：問題　現象　テーマ　対象
		研究領域：当該領域　関係領域
		研究方法：研究方法　調査
		研究結果：結論　研究結果
		先行研究：先行研究　資料　書籍　参考　出典　前人
		他の構成要素：研究価値
執筆過程	24	提示　収集　調査　分析　示す　得る　見つける　論述　解析　解答　作成　報告　論証　まとめる　探る
文体上の特徴	8	文体　専用語　書面語　感想文　一般言葉　規範
読者への配慮	8	人　読者　理解　伝達

全体的には、**内容上の特徴**が出現頻度が41と最も多く言及され、**構成要素**と**執筆過程**の頻度もそれぞれ29と24と高かった。協力者は学術的文章の定義を行う際に、上記の諸側面を重視していることが分かった。それらについては、AW授業で指導項目として受講し、かつ課題レポートや卒業論文などのAW経験により、知識として内在化でき、適切な認識が形成できていることが確認できた。

一方、本稿が注目している「先行研究」（表2の網掛け部分）については、言及されているものの出現頻度が5にとどまり、その他の諸構成要素より少ない[7)]。本稿では「学術的文章」として調査報告や学術論文を認めており、社説などのジャンルとは異なる。そのため、「先行研究」という要素は必須であると考えられる。出現頻度が5にとどまったという結果から、協力者には、必ずしも「先行研究」の重要性が十分に認識できているとは言えない。

文体上の特徴と**読者への配慮**はともに頻度が8と少数であった。前者は学術的文章と他のジャンルと区別するための重要な手がかりであり、AW授業の指導項目でもあったものの、まだ十分に認識されていない可能性が認められる。一方、後者はAW授業の重要な指導項目として位置づけられていなかったが、一部の協力者が卒業論文などの執筆経験から、読者への円滑な情報伝達を行うことが「一番重要なこと」と考え、他の側面より最も重視していることがうかがえた。

4-2-2　先行研究が必要とされる理由

データⅡの抽出語についてクラスター分析を行い、その結果に合わせ、意味内容のある語彙と対応してさらにカテゴリー分類を行って表3にまとめた。

学術的文章に対する定義（データⅠ）に「先行研究」という構成要素への言及は少なかったが、表3に示されたように、先行研究が必要とされる理由について様々な側面から述べられた。**研究状況の把握**が出現頻度が22と最も顕著に見られ、**自身の研究の位置づけの明確化**と**自身の研究の独創性と研究価値の表明**についても多く言及された。上記の三つは本論に至るまでの研究背景や研究意義などに関する記述における先行研究の役割である。

観点、方法、構成等の参考や補足と**自身の研究の説得力の補強**もそれぞれ17と16と多く述べられたことから、先行研究を自身がAWを行う際の参考書的

表３　データⅡのコーディング化結果（n＝61）

コード	頻度	関連語の例	自由記述の例
研究状況の把握	22	領域　把握　概観 役立つ	• 先行研究は前人が当該領域で得られた研究成果であり、それを背景として自分の論文を書く前にはっきりさせる必要がある。
観点、方法、構成等の参考や補足	17	研究方法　モデル 多様化　全面的 探す	• 前人の研究方法を参考にすることは、自分の研究に適する方法を探すのに大変役立つ。 • 前人の研究の結論と考え方は、読者にヒントを与えることができ、自分の論述とも補い、観点の多様化に意義がある。
自身の研究の説得力の補強	16	説得力　根拠　証拠 信頼　論理性	• 信頼できる前人の研究成果にあるデータや観点などで、自分の論文の観点を支持して説得力を強めることができる。 •「先行研究」という部分の存在は自分の論文の完全性と論理性を増やすことができる。
読者への配慮	15	読者　審査の先生 理解　促す　紹介 証明	• 先行研究がなければ、自分の研究の可能性が確認できず、参考にできるものもないため、審査の先生に論文が本当に自分で書いたものであることを証明できない。
自身の研究の位置づけの明確化	14	位置づけ	•「先行研究」に関する記述は自分の論文の属する研究分野を概観し、自分の論文の位置づけを示すことができる。
自身の研究の独創性と研究価値の表明	11	オリジナリティー 異なる　重複　表明	• まだ研究されていない部分を発見して自分の論文のオリジナリティーを高めるために役立つ。
他の研究者への敬意表示	1	尊重	• 先行研究の成果への尊重を示すことができる。

な存在と位置づけ、論を展開する際の論拠や証拠として先行研究を引用するという協力者の意識が見て取れる。**他の研究者への敬意表示**に関する記述も極少数ながら現れたように、協力者においては、他者の研究や文献を権威あるものとして、そこから知識を吸収するという立場、即ち経験者である他者から学ぶ、「学習者としての姿勢」がうかがえる。

同時に、**自身の研究の独創性と研究価値の表明**に「オリジナリティー」などの記述が見られたものの、外の情報を批判的に読解し、メタ的に捉えた上で検討して評価する意識が乏しく、批判的な読み方にはまだ慣れていないことが推測される。

協力者は全体的に受け身的な姿勢が顕著であるが、例１と例２の記述例からは、AW 経験の蓄積から先行研究の扱い方に関する理解を深化できていることが分かる。

例１　先行研究を通して、これまでどのような結論が得られ、どのような研究が行われているかが分かり、自分にとって必要な研究内容がはっきりできる。先行研究は自分の論文の参考にもなるし、自分も先行研究の不足な側面を補い、より全面的な研究ができる。

例２　1.「先行研究」に関する記述は自分の書いたものと引用したものとはっきり区別させることができるからである。2.「先行研究」に関する記述は自分の論文の属する研究領域を概観し、自分の論文の位置づけをも示すことができる。3. よりよく関連研究の状況を整理し、読者に自分の研究内容を伝えることができるからである。

例１は三年生の記述であり、網掛け部分の「どのような研究が行われているかが分かる」という記述にとどまっていた。それらを「自分の論文の参考」とし、学習者としての立場に立ち、先行研究から知識を吸収するという姿勢は見られたが、自身の研究の位置づけについては不明のままであった。また、先行研究の役割について下線部の「より全面的な研究」と述べられたが、調査票回収後の内容確認において、協力者は、その記述は研究としての完全性ではなく、あらゆる側面に触れることを意味していると説明したが、「全面的な研究」の具体的な方法については、漠然としたイメージしか有していないことが明らかであった。

一方、四年生である例２の回答者は、課題レポートと卒業論文のほか、研究計画書と研究助成の申請書も作成したことがあり、比較的豊かな AW 経験がある。当該協力者は、網掛け部分のように、「自分の論文の属する研究領域を概観する」ことに続き、「自

表４　引用の可否及び方法の基準に関する選択結果
（n＝30）

選択結果	三年生	四年生
適切な回答（22）	11	11
場合によっては適切な回答（4）	1	3
明らかに不適切な回答（4）	3	1

分の論文の位置づけをも示す」と述べ、自身の研究と従来の研究との関係を明確に示していた。先行研究が必要な理由として、例２の記述にある番号「1」「2」「3」のとおりにまとめられており、下線部の「引用との区別の明示」、「自身の研究の位置づけの明確化」、また「読者への情報伝達」といった異なる側面において具体的に記述されている。

他にも、**読者への配慮**といった、一般的に他の側面より重要度が低く、指導時の優先順位は高くないと考えられる読者の理解の手がかりについて、データⅠの「学術的文章の定義」の自由記述と同様に多く言及され、教員などの読者への配慮が見られた。特に卒業論文の場合、評価者の教員は必ずしも自分のテーマを専門としない可能性があるため、その状況を具体的に想定した上で執筆を行い、自身の主張を効果的に訴えようとした姿勢が見られる。本来、読者がさらに当該研究を深く理解しようとする場合には、文章中に提示された先行研究を手がかりとして関連文献の情報を得ることが可能である。

4-2-3　引用の可否及び方法の基準

引用の可否及び方法の基準についての選択結果にＥとＦが含まれるものを「明らかに不適切な回答」、Ｄが含まれるものを「場合によっては適切な回答」、それ以外は「適切な回答」として表４に集計した。

全体の７割を超えた22名が「適切な回答」をしており、引用の可否及び方法の基準に関する知識を持っているか、形成しつつあると推測された。また、「明らかに不適切な回答」をした者は４名と少数であるが、彼らは先行研究の引用について適切な認識を有しない、またメタ的に捉えて解釈・評価する意識が欠ける可能性が高いと推測される。

上記の結果については、4-3において彼らのAWにおける引用への自己評価と関連させて考察する。

表５　引用の可否及び方法についての認識と自己評価
（n＝30）

自己評価 ＼ 引用の可否及び方法の基準に関する回答	A（7）	B（22）	C（1）
適切な回答（22）	4	18	0
場合によっては適切な回答（4）	2	2	0
明らかに不適切な回答（4）	1	2	1

4-3　過去のAWにおける引用の経験と意識

4-3-1　過去の引用への自己評価とその理由をめぐる内省

協力者の過去のAWにおける引用について、引用の内容、引用の方法、分量などの側面から、「A的確であった」「B的確ではなかった」「Cどちらとも言えない」を選択して自己評価させ、BとCを選択した場合、さらにその理由を自由記述するよう求めた。

自己評価させた結果、Bが22名（73%）、Cが１名（4%）に選択されており、全体の約８割が低く自己評価をしていることが分かった。彼らの自己評価と、表４で示した選択結果と統合して表５にまとめた。

「A的確であった」を選択して高く自己評価した７名の協力者には、引用に関する正確な知識を有し、かつ卒業論文等の学術的文章の完成度が高い者と、そうでない者が存在している。一方、適切に回答し、引用の基準に関する正確な知識を有すると推測される協力者のうち、「B的確ではなかった」を選択して低く自己評価をした者が18名見られた（表５の網掛け部分）。引用の知識を多く有する者ほど低く自己評価する傾向がうかがえた。

自己評価の理由、即ちデータⅢの抽出語をコーディング化し、クロス集計を行った。それとクラスター分析の結果に合わせてカテゴリー分類を行って表６にまとめた。

分量への内省については、学習環境面での諸制限により必要な文献資料が入手しにくい点が多く挙げられたが、外的要因についての議論は別稿に譲る。**現状への内省**には、執筆前の読解や引用内容の質、自身の研究との関係性など、先行研究の取捨選択の失敗した経験から、執筆中の要約や読解、評価の問題まで、様々な観点から各自の問題点を指摘しており、「言及すべき理論や概念を抜けた」問題についても認識できた。さらに、問題の原因となる**能力や意欲への内省**まで行い、経験や関連知識の不足、自身

表6　データⅢのコーディング化結果（n＝50）

コード	頻度	カテゴリー名	自由記述の例
分量への内省	21	分量の不足	• 先行研究を十分に収集できなかった。
現状への内省	17	先行研究と無関係	• 引用するだけにとどまり、自分の論文と切り離した感じである。
		読解が不十分	• 卒業論文における文献の引用の多くは自分の論文の局所的な論点を支えるためであり、先行研究を詳細に読んでいなかった。
		要約が不十分	• 入手できた先行研究についてもよくまとめられなかった。
		解説や評価が不足	• 関連する先行研究について深く探ることができず、先行研究のまとめと分析も具体的でなく、体系的でなかった。
		必要な情報が欠如	• 先行研究の表を引用した時、出典をはっきり書いていなかった。
		言及すべき理論や概念を抜けた	• 先行研究では理論的な概念に基づいて例を論述しているが、私は理論的な概念を言及しないで先行研究の論述を直接引用した。
		引用の関連性や質が低下	• 分量もちょっと少なく、代表的とは言えない。
能力や意欲への内省	13	読解力や要約力が欠如	• 先行研究は分量が長いものが多く、内容が深くて分かりにくいものもあるため、まとめるのに難しい。
		AW 経験が欠如	• 以前学術的文章を書いた経験がないし、分からないことばかりで本当に大変であった。
		引用方法の知識が欠如	• 引用方法については勉強不足である。
		学習意欲が欠如	• 入手した資料を、自分が最後まで読み通す根気に欠ける。

の読解力や要約力の不足などについての気づきも見られた。このように、協力者は各自の既有知識を駆使して自己分析を行い、ある程度自分の弱点を具体的に指摘できたことは評価に値すると考えられる。

協力者の自己評価とその理由への内省から、引用に関する知識を獲得する過程での様相がうかがえた。他者の情報を自分の文章へ適切に取り入れて文章化する際には、情報の収集力、要約力、視点や表現の調整能力など様々な能力が必要である（二通 2009）。教育現場においては、授業や AW 実践から、自身の知識量の自己分析と適切な評価を促すことが重要であろう。

4-3-2　引用における困難点と解決策

データⅣについて抽出語をそれぞれ**困難点**と**解決策**をコード名でコーディング化し、クロス集計を行った。**困難点**への言及が多く、**解決策**についての記述が少なかった。各コードに表7に示されたカテゴリーが見られた。

全体的には、執筆開始前の文献の取捨選択と、自身の研究テーマとの関連性を判断した上で文献内の情報を取り入れることについて多くの者が困難を感じている。また、執筆開始後に、自身の研究との関係の説明や、引用内容の理解・解説・評価が困難である記述が多かった。

なお、前述した文献の入手困難な現状については議論を割愛する。

挙げられた困難点の**解決策**については、適切な対策がある一方、表7の網掛け部分のように、**言語表現を選択や理解不能な内容の引用を回避**といった、問題解決につながらないものも含まれた。「先行研究の言葉遣いと類似しないように注意」することと、理解できない概念を避けて「直接に先行研究の論述内容を引用」することのいずれも解決策とは考えられず、むしろ剽窃などの研究倫理に関わる問題を起こす危険性を招く結果になるだろう。以下、自由記述例の例3と例4に基づいて詳述する。

例3　**困難点**：先行研究に提示された観点は、自分がその文献を読む前に考えたものである場合、引用すべきか、自分の言葉で述べるかは分からなかった。
解決策：自分の言葉で観点を述べ、できるだけ先行研究の言葉遣いと類似しないように気をつけていた。

例3で述べられた困難点は引用の必要性の判断に関わっており、AW の初心者が特に戸惑いを感じやすい問題と考えられる。当該協力者は、下線部のように、先行研究の引用をせず、異なる表現で記述し、自分の主張であるように見せかける方法を考案した。たとえ先行研究と言語表現が異なっても、正しく引

表７　データⅣのコーディング化結果（n＝87）

コード	頻度	カテゴリー名	自由記述の例
困難点	50	学習環境が不備	• 外国の書籍や資料は国内で入手しにくい。
		研究計画が不足	• 先行研究の収集と研究計画が不十分であったため、自分の論文に役立つ先行研究を選んで引用することができなかった。
		文献の取捨選択が困難	• 先行研究の中にも類似したものがあってどれを取り入れるか迷ってしまう。
		引用の必要性の判断が困難	• 自分の研究方向が先行研究と重なる時、自分が剽窃をしているように思われることが心配で、書くべきかどうか迷ってしまう。
		引用方法の知識が不足	• 先行研究をまとめる時の分類方法が分からない。
		間接引用が困難	• 自分の力では簡潔で適切な先行研究のまとめが書けず、たくさんの直接引用をしてしまった。
		引用内容の理解・解説・評価が困難	• 先行研究のいい点と悪い点の指摘も難しかった。 • 先行研究を引用した場合、どのように引用した内容を解説して評価すればいいか悩んだことがある。
		自身の研究との関連づけが欠如	• 先行研究と自分の論文との関係をはっきり説明することが難しい。
		自身の研究が先行研究に影響される	• 研究テーマを決定したが、先行研究が見つからなかったため、テーマを変えるしかなかった。
解決策	19	教材や他者の援助を求める	• 自分がどうしても解決できないとき、先生や先輩に聞いていた。
		文献読解を強化	• 何本かの先行研究は内容が類似したため、自分の研究に有用そうなもののタイトルをメモし、それぞれをさらに読んでみた。
		引用内容を再検討	• もっと真剣に引用すべき内容を選択して分析し、自分の論文と最も関係のある部分を選択するようにした。
		検索範囲を修正	• 検索の範囲を拡大し、できるだけ関連のある他の領域の先行研究も探していた。
		言語表現を選択	• 自分の言葉で観点を述べ、できるだけ先行研究の言葉遣いと類似しないように注意していた。
		理解不能な内容の引用を回避	• それらの概念を避けて、直接に先行研究の論述内容を引用した。

用の手続きを踏まえない場合、「剽窃」に陥る危険性があるため、AW 教育の早い段階からの十分な指導が必須であろう。

また、次の例４は、自身の「論述の不明瞭を招く可能性」を避けるための対策として、下線部のように先行研究の内容を理解しないまま直接引用していたと記述している。

例４　**困難点**：先行研究はメタファー及びメトニミーの概念に基づいて論じているが、認知言語学を詳しく勉強したことがないので、それらの概念があまり分からない。
解決策：無理やりメタファー及びメトニミーの概念を利用すれば、論述の不明瞭を招く可能性があると思ったので、それらの概念を避けて、<u>直接先行研究の論述内容を引用した</u>。

例４の回答者は、取り入れようとする文献への理解が十分にできないため、先行研究の指摘の要約が必要である間接引用の代わりに、自らの解釈や評価をせずに直接引用を行うという対策によって困難点を解決しようとした。このように、協力者は引用の際に、他者の情報を批判的に検討して自身の研究の目的に応じて引用すべき情報の質と量を正確に判断して指摘する能力が不十分で、直接引用より間接引用に困難を感じていることが観察された。

しかし、直接引用の場合でも、出典やページ数などの引用手続きを踏まえるだけでは不十分であり、間接引用の場合と同様に引用内容への正確な理解が必要である。例４に述べられた解決策自体は、当該協力者が避けようとした「論述の不明瞭を招く」ことにつながる危険性もあるだろう。引用に関する指導では、必要な情報の提示や要約の手法など具体的な表現や形式の指導に先立ち、直接引用と間接引用は、両者とも、扱う文献の内容に対する正確な理解

の重要性を認識させて引用作法を定着することが重要であると考えられる。

4-4　引用に関する意識 ── 典型例の分析から ──

意識調査の結果からは、先行研究の扱い方について知識が一定程度あると見られるものの、実際のAWにおいて様々な問題点が現れるケースが見られた。本節では、引用の基準などの知識を有し、かつ適切に自己評価を行ったと判断された協力者の自由記述例を取り上げ、引用に関する意識の様相を明らかにする。

例５は三年生の自由記述であるが、当該協力者は日本語による課題レポートのほか、中国語での研究計画書、研究費助成の申請書と研究報告書の執筆経験がある。

例５　**学術的文章の定義**　学術的文章とは、厳密性、書き言葉といった文体的特徴のほか、学術や技術などの側面で独創性があって建設的で、自分の主張を示す文章である。

学術的文章で先行研究が必要とされる理由　まず、自分が書こうとするテーマに関するこれまでの研究を整理して把握し、関連領域への認識を深化するために役立つ。次に、読者がこの領域に関連する知識を把握し、自分の論文を理解するのに役立つ。

過去のAWにおける引用への内省　先行研究としては、国内外のすべての関連研究を読んでからまとめるべきであるが、これまでに書かれた論文は数本のものだけに言及し、批判的な評価もレベルが低かった。

過去のAWにおける引用の困難点と解決策　困難点：引用の意識が薄いことである。引用しようと思う時は、引用すべき内容を忘れてしまったり、引用したい内容への理解が不十分なため、上手に引用できないという問題がある。解決策：いい文を見つけたら、理解できるまで用心深く読んでみた。また文章のどの部分を引用するかを予め考える。

学術的文章の定義には、文体的特徴とともに、内容面についても比較的適切に解釈している。また、引用が必要な理由に関する記述は、引用を、執筆者としての研究状況の把握と読者に対して効果的にアピールする手段と見なしていることがうかがえた。

一方、過去のAWにおける引用への内省には、「批判的な評価」に関する能力の不足を反省している。当該協力者は、先行研究の適切な扱い方に関連する知識を身につけていることが期待されるものの、実際のAWにおいて、どこに、どの部分を、どのように引用の内容として取り入れるかについては戸惑いを感じていることがうかがえた。また、自身の引用については、「引用の意識が薄い」という問題点が挙げられた。具体的には、「引用すべき内容を忘れてしまう」ことや「引用したい内容への理解が不十分」であるため、「上手に引用できない」結果になるという。

また、前述にも言及したように、例５のような読者への配慮と考えられる記述は、「読者の自身の文章に対する理解を促す」「読者に考える余地を与える」「読者に背景知識を提示」などのように、今回の調査で複数の自由記述に言及されていた。彼らの読者は、担当科目の教師や卒業論文の指導教員、また同級生や後輩が想定され、必ずしも専門分野は厳密的には一致しないと言える状況がある。そのような背景が今回の結果につながった可能性があると考えられる。

次の例６は四年生が卒業論文の執筆経験に基づいた自由記述である。

例６　**学術的文章の定義**　学術的文章とは、あるテーマをめぐって、問題を提示し、客観的な事実や科学的な実験に基づいてその問題に答える文章だと思う。

学術的文章で先行研究が必要とされる理由　先行研究の記述により、自分の論文と先行研究との関係を示すことができて、提出した論文は剽窃や杜撰したものではないことが証明できると思う。

過去のAWにおける引用への内省　引用の分量が足りない。理由：自分のテーマに関する先行研究があまりなかったり、なかなか見つからなかったりして、引用の時に困っていた。

過去のAWにおける引用の困難点と解決

策　困難点：どのように先行研究を評価するか分からなかった。先行研究の不足している点が見つからなかったり、自分は日本語の学習歴がただ三、四年で、他の日本人の学者の文章について指摘したりするというのはどうかなと思っている。

先行研究を引用する理由については、剽窃を避けることに言及しており、引用に関する知識を有していると推測される。一方、実際の困難点としては、下線部のように「先行研究の不足している点が見つから」ないことと、「日本人の学者の文章について指摘」する作業は、十分に行えるか不安に思う様子が記述されている。

他者の研究の「不足している点を見つけるべき」という思い込みがある一方、自分より言語能力や研究経験が優位なレベルにある「日本人の学者」の研究を批判的に読む立場への戸惑いがうかがえた。さらに、「批判的に読む」ことを、個々の先行研究の「不足している点を見つける」ことと認識しており、「先行研究をメタ的に扱い、批判的に読む」姿勢や方法が十分ではないと推測される。

以上述べたような「知識」と「意識」の乖離をなくすために、教育実践方法のさらなる検討が必要である。引用すべき内容の取捨選択や、読解・解釈の適切さという文章化以前の問題は解決がより難しいと言える。そのような問題を抱えることを学習者が先行研究の扱い方に関する知識を獲得する過程にある様相の一つとして捉え、「知識」の説明後に、どのようにしてそれを学習者の「意識」に内在化させるかは教育実践の課題の一つであろう。

以上、意識調査の結果から引用について一定の知識を有すると判断された例５と例６の協力者は、ともに引用の分量の不十分さと、引用すべき内容への読解・理解能力の低さが明らかになっている。後者は、引用に必須の読解能力の涵養に優先順位の高い指導項目であろう。

5　まとめと今後の課題

本稿は、中国の上級レベルの日本語学習者によるAW上の引用に関する意識の一端を明らかにするために、中国の大学で日本語を専攻している学部三、四年生合計30名を対象にアンケート調査を実施した。調査結果に基づき、協力者の学術的文章の定義と先行研究の引用に関する認識と、自身のAWにおける引用の経験と意識を中心に調査結果をまとめて考察を行った。

協力者は内容上の特徴、執筆過程、構成要素など様々な側面から学術的文章を捉えているものの、研究には「先行研究」が不可欠であることへの十分な認識が形成できているとは言い難いと考えられる。また、先行研究を扱う際に、他者の研究や文献を権威あるものとして、そこから知識を吸収するという立場、即ち「学習者としての姿勢」がうかがえる。また、外の情報を批判的に読解し、メタ的に捉えた上で検討して評価する意識が乏しく、批判的な読み方が弱いことがうかがえた。

過去のAW時における引用については、全体的に低く自己評価をしており、他者の研究の適切な位置づけに関する判断力の不足、分類や評価を行う能力の欠如などの理由が述べられていた。また、困難点と解決策については、外界の情報を批判的に検討して指摘する能力が欠如し、直接引用より間接引用に困難を感じることが明らかになった。

以上の課題については、研究活動の豊富な大学院生の場合と同等に扱うことはできないが、文章を批判的に読み評価する練習と執筆経験の増加により改善が図れると考えられる。こうしたAW能力の向上につながる文献読解の機会は授業内外で増やすよう検討したい。

なお、本稿の分析手法はテキストマイニング及び質的分析であったが、今後、学習者の実際に作成した文章を分析した結果とも合わせて総合的に考察を行い、さらなる教育的示唆を得る必要がある。

また、今後、日本に留学している学習者も研究対象とし、レポートや論文の執筆経験の有無など、「在学段階の差異の視点」（村岡　2018）も入れ、学部高学年から大学院生までの学習者を対象に、引用作業における具体的な困難点を把握するために調査を行う予定である。

謝辞

本研究は中国青年骨幹教師海外研修プロジェクト（番号：201706755038）の助成を受けて行った。

注

1）中国では、日本語専攻者を対象に日本語検定試験

（NSS：全国高校日语专业日语统测）が実施されている。四級（NSS-4、日本語専攻者二年生向け）と八級（NSS-8、日本語専攻者四年生向け）に分けられる。一般には、四級試験の難易度は国際日本語能力試験の１級と２級の間にあると言われる。問題形式は、語彙、文法（現代文法と古典文法）、聴解、作文などが含まれる。

2） 本稿では、考察の便宜上、アンケート調査票における質問項目と異なる順番で提示している。

3） KH Coderはフリーのテキストマイニングツールであり、多変量解析や語句の共起ネットワーク作成などの可視化機能を多数備えており、計量テキスト分析の支援ツールとして評価されている。

4） 例えば、協力者が自身のAW経験に言及する際に例示した「源氏物語」「探偵アニメ」などの単語は、本稿で注目する引用の行動や内省に関係のない表現と判断して除外した。

5） 本研究のテキストデータは分量が比較的少なく、かつデータ間の類似度を考慮したいため、階層的クラスター分析の手法を採用した。Ward法とJaccard距離はクラスター分析時に使用される、クラスター間の距離を定義する関数と、変数の関連を測定するための類似性測度の指標である。

6） データⅠ：p＝0.642＞0.05；データⅡ：p＝0.834＞0.05；データⅢ：p＝0.869＞0.05；データⅣ：p＝１＞0.05。

7） 他の構成要素の出現頻度は、「研究対象」が17、「研究領域」「研究方法」と「研究結果」がそれぞれ10、「他の構成要素」が２である。なお、１文に複数の関連語が含まれることもあるため、各カテゴリーの出現頻度は関連語の合計ではない。

参考文献

大島弥生（2017）「引用を学ぶ基礎の段階の大学生の文章に見られる諸問題」『第19回専門日本語教育学会研究討論会誌』pp.24-25.

大島弥生・生天目知美（2018）「資料分析型論文における史料引用による叙述と解釈部分の構造と表現――歴史学／国際政治学／地域研究分野の論文を例に――」『第20回専門日本語教育学会研究討論会誌』pp.30-31.

小林しのぶ（2015）「テキストマイニングの技術と動向」『計算機統計学』28（1），pp.31-40.

清水まさ子（2009）「異なる専門分野における引用文の表現方法：５種類の人文系論文を比較して」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』15，pp.1-11.

清水まさ子（2010a）「～ハ～テイル引用文の論文中での使用目的」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』２，pp.90-100.

清水まさ子（2010b）「先行研究を引用する際の引用文の文末表現――テンス・アスペクト的な観点からの一考察――」『日本語教育』147，pp.52-66.

中村かおり・近藤裕子・向井留実子（2016）「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分析と課題」『2016年日本語教育国際研究大会予稿集』（電子版）.

二通信子（2009）「論文の引用に関する基礎調査と引用モデルの試案」『アカデミックジャパニーズ・ジャーナル』１，pp.65-74.

樋口耕一（2004）「テキスト型データの計量的分析――２つのアプローチの峻別と統合――」『理論と方法』，数理社会学会，19（1），pp.101-115.

村岡貴子・因京子・仁科喜久子（2013）『論文作成のための文章力向上プログラム――アカデミック・ライティングの核心をつかむ――』，大阪大学出版会.

村岡貴子（2018）「第１章　大学と社会をつなぐライティング教育の視点」村岡貴子・鎌田美千子・仁科喜久子編著『大学と社会をつなぐライティング教育』，くろしお出版，pp.3-13.

矢野和歌子（2014a）「人文・社会学系優秀卒業論文の分析――引用の使用に関する基礎調査――」『専門日本語教育研究』16，pp.67-72.

矢野和歌子（2014b）「学部留学生の論説文における引用の課題」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』６，pp.94-101.

山本富美子・二通信子（2015）「論文の引用・解釈構造――人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究――」『日本語教育』160，pp.94-109.

山本富美子（2016）「論文の『意図的ではない剽窃』の問題：モダリティの混同と解釈のない引用」『Global communication』６，pp.117-132.

楊秀娥（2017）「日本語学習者の引用使用の実態調査――中国国内における日本語専攻課程の学部生の卒業論文を対象に――」『専門日本語教育研究』19，pp.57-62.

刘伟（2017）『中国人日本語学習者のライティングに関する実証的研究――論理的文章作成を目ざす指導方法の改善に向けて――』，暨南大学出版社.

付　録

学術的な文章の作成における
引用意識に関するアンケート調査

氏名 ＿＿＿＿＿＿ 電話番号 ＿＿＿＿＿＿
学年 ＿＿＿＿＿＿ QQ/Wechat ＿＿＿＿＿＿

Q1．学術的な文章とはどのような文章だと思いますか。自分で定義してみてください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Q2．大学入学後、現在までの間にどのような学術的な文章を書いたことがありますか。適切な選択肢を選んで○を付けてください。（複数選択可）

A　受講科目のレポート
B　研究計画書
C　研究費助成の申請書
D　研究報告書
E　卒業論文
F　その他 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Q3．自身の文章における先行研究の扱い方について、以下に示された考え方に合うものはありますか。自分の考え方に合うものに○を付けてください。（複数選択可）

A. 自分が思っていることは先行研究に既に書かれているが、それを読む前に思いついたため、先行研究に言及しなくてもよい。
B. 複数の先行研究をもとに、自分でまとめ直したため、自分の文章では、それらの先行研究に言及しなくてもよい。
C. 複数の先行研究を引用する場合、時系列で配列すればよい。
D. 複数の先行研究を引用する場合、それらの互いの関係を見極めた上で、自分の研究の論理にしたがってまとめなければならない。
E. 取り入れた先行研究について、評価すべき点や不十分な点を明確に述べなければならない。
F. 取り入れた先行研究と自身の文章の主張との関係を明確にしなければならない。

Q4．自分の作成した学術的な文章で「先行研究」を引用した経験を思い出してください。その際の引用は、内容、引用方法、及びその分量は十分であったと思いますか。該当するものに○を付けてください。

①　十分であった
（→5に答えずに、6に進んでください）
②　十分ではなかった
（→5に答えてください）
③　どちらとも言えない
（→5に答えてください）

Q5．Q4で②と③を選択した場合、具体的に何が不十分であるか、また、その理由について書いてください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Q6．学術的な文章に「先行研究」に関する記述が必要な理由は何か、書いてください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Q7．先行研究の引用で、困難を感じたことはありますか。あれば、具体的に書いてください。また、その困難を乗り越えた経験があれば、どのように乗り越えたか、書いてください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

以上、ご協力をありがとうございました。